

古代土器研究の現状と問題点

三好美穂

奈良市教育委員会の三好と申します。どうぞ宜しくお願いします。

私に与えられた課題は「平城京土器研究の現状と問題点」ということです。平城京の土器の研究をやりだしてから二十数年たつてしましましたが、その時々によって土器の問題とか現状がよく変わってきます。とりあえず今回は2004年の段階での問題点ということで話をさせていただきたいと思います。平城京の土器研究の現状ということですが、やはり土器研究の現状を語るときにまず編年の話、土器様相の話という二つを踏まえてそれぞれお話ししていただくのがいいのかなと思いますので、二つにわけてお話をさせていただきます。その二つのお話をしたのちにそれを受けた形で問題点を提起するといったような方向で話を進めて行きたいと思います。

まず編年ですが、平城京の編年はみなさんもご存知のように奈良国立文化財研究所の今はお亡くなりになりました西 弘海先生の編年案が提示されて以来、ほぼ現在に至るまで編年案というのは変わっていません⁽¹⁾。今、平城の編年には奈良文化財研究所が出された平城編年と私が奈良時代後半から平安時代前半を対象にした南都土器編年とがあります⁽²⁾。とりあえず奈良時代から平安時代前半の編年について提示しているものは今の所その二つであることを認識していただきたいと思います。ただ、奈良国立文化財研究所が提示された平城宮土器編年の方が主流となっているという状態です。

平城宮土器編年についてあまり詳しく言っても30分という短い時間では語りつくせないので、概要をちょっと説明させていただくに留めます。平城宮土器編年というのは平城宮が都として遷都されてから9世紀前葉ぐらいまでの間、紀年木簡が伴う土器群と遺構の変遷を根拠にしてⅠからⅦに区分された編年でございます。

ところがですね、この土器編年というのは土器の型式による編年ではないということ、ここがポイントですのでこの辺はよく覚えておいていただきたいのです。ではどういったことが基準となって編年されているかと申しますと、紀年銘のある木簡が含まれた土器群に、それにその木簡に書かれた実年代を基準に土器を並べていった、というところに由来している編年です。文章に書いておきましたが、紀年木簡が伴う土器群をそれぞれTab. 4に資料として記させていただきました。

ところでその土器群をその木簡を根拠に7つに区分してみると、土器型式による編年ではないというもの、その土器群に法量縮小ですか、径高指數の変化、土師器の暗文の省略化ですか、それから調整技法の変化といった、いわゆる型式的特徴に相違があるということも土器を概観すればわかることですから、型式変化があるということが指摘されております。

さらに長屋王の発掘調査ではかなり奈良時代の土器が出まして、それをもとにもっと細分化できるということで、平城宮土器Ⅲの土器群は新たに古相・中相・新相に細分できるのではないかという指摘が数年前になされております。現在、文化庁にいる玉田さんが指摘されたのですけれども⁽³⁾、そういう形で今も平城の土器編年というのはⅠからⅦ、平城のⅢに至りましては古相・中相・新相の3段階に分けるというかたちで、西さんが提示されて以来、玉田さん、巽さん⁽⁴⁾がそれぞれ肉付けしてずっと行われてきているというようなわけです。

Tab. 4に平城ⅠからⅦの資料を付けております。平城宮発掘調査報告XIIIに掲載されているものです。最近では資料の例も増えてきていて、最新の情報では各Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、に比定されてい

Tab. 4 平城宮土器の大別

時期	主要遺構	略年代	年代推定の根拠	備考
I	S D1900	710	「過所」木簡 大宝元年～和銅3年 (701) (710)	『報告IX』
	S D3765下層			『報告X I』
	S D8600 (104次)	715	木簡 和銅2年～8年 (709) (715)	未報告
II	S D3035	716	木簡 靈亀2年～神亀2年 (716) (725)	未報告
	薬師寺井戸S E47		木簡 靈亀2年 (716)	『薬師寺報告』
	平城京 S D485		木簡 神亀5年～天平元年 (728) (729)	『報告VI』
	S K12965 (177次)		木簡 養老2～4年・6年 (718～720、722)	『61年度概報』
	S K2102		木簡 神亀5年～天平元年 (728) (729)	『報告VII』
	S D1250 (122次)		木簡 神亀4年・天平3・4・6年 (734)	未報告
	長屋皇宮木簡出土 井戸S E4699		木簡 養老元年 (717)	『長屋王邸宅と木簡』
	長屋親皇木簡出土 溝S D4750		木簡 和銅4年～靈亀2年 (711) (716)	『同上』
III	東二坊坊間路西側溝 S D4699 (左三・二・七坪)	730	木簡 天平2年 (730)	未報告
	東西大溝S D1500		木簡 天平6～8・10年 (734) (738)	未報告
	東西大溝S D5300		墨書土器天平13年 (741)	
	前川遺跡			奈良市『朱雀大路報告書』
	SK820		木簡 天平17・18年 (746)	『報告VII』
	S K2102	750	木簡 天平18年 天平勝宝2年 (750)	『同上』
IV	S B7802柱抜取穴		木簡 天平勝宝5年 (753)	『報告X I』
	S K219	760	木簡 天平宝字6年 (762)	『報告IV』
V	S D3236C (104次)		木簡 天平神護2年・宝亀5・6年 (766) (775)	未報告
	S K2113		木簡 「左衛士府」天平宝字2年以降 (766) (776)	『報告VII』
	S K870			『同上』
	S E6166	784	墨書土器「主馬」 天応元年～延暦3年	『報告X II』

※『平城宮発掘調査報告X III』1991奈良国立文化財研究所 P375掲載より抜粋

る土器群が本表よりも少し増えてきているというような状況です。奈良文化財研究所の各報告に書いてございますので、土器の概要につきましては概報若しくは年報を参考にしていただきたいと思います。年代の推定根拠になるのは、木簡で中央欄に列記しています。平城の土器というのは木簡が、紀年が伴う木簡が伴出するというので全国的にもすごく注目されております。人間って不思議だなと思っているのですけれども紀年銘のある木簡がどっと一緒に出てくると、なんの検討もなしにその土器群もそのぐらいの時期で良いのではないかということで考えたくなってしまう。そして、なんの検討もせずに紀年銘が伴った木簡が一緒に土器と出ているからこの土器群はこの時期のものだろうというように短絡的に位置づけてしまうというのは手法としてはまちがっているので、そのへんは非常に気を付けなければい

けないとは思っています。

ただ紀年銘が伴う資料が一緒に出てくるというはある意味すごいことであります。そのへんは資料をきちんと十分に検討できる方法論を土器の研究者は持っていないわけないということで大変なことであるな、ということをいつも考えております。

一番やって欲しくないと思うことは、平城京の土器の編年観をそのまま他地域の所にスライドさせてしまって、「この土器ちょっと似ているからうちの土器も平城と同じ年代なんだわ」というやり方が全国的にメジャーな方法で行われていることです。そうしますと全国同じように平城と同じような動きで遺跡が動いているという結果になってしまいますよね。それはそれで十分な検討を重ねてそういう動きがみられるのであれば、それはそうでしょうでしょうけれども、ただ十分な在地に根ざした研究なしに平城と似ているからうちもこの年代といったやり方、これはもうまったく考古学的にまちがっているので、そのへんはよく考えて使わなければいけないのだということを考えています。

それから先ほど申しましたように平城の編年だけでなく南都の編年がありますよということで紹介させていただいたのですが、南都の土器編年というのは奈良時代後半から平安時代の土器群（これはさっきも武田さんの方からお話しがありました）平城京ではこのあたりの時期の遺物が結構多いんですね。そうしますとやっぱり型式的に基づいた土器編年ではないと、なかなか詳細な遺構変遷が追えないということもございまして、奈良時代後半から平安時代前半を中心にいたしまして南都土器編年というのを作りました⁽⁵⁾。これは大量に出土する土師器を基軸に捉えた型式編年というかたちでやらせていただきました。ですから平城宮土器編年との相違点はあくまでも型式的な特徴で土器群の変遷を捉えまして、その結果なし得たものというわけです。奈良時代に関していいますと平城のⅣとⅤというところが南都土器編年のⅠ期の古段階と中段階に当たるわけですけれども、型式的だけで追ってみると、なかなか平城の編年と考え方が合ってこない部分が出てきました。それはどういったことかといいますと平城宮土器はⅣとⅤというところでⅣはⅣ、ⅤはⅤと区分されているのですけれども、土器の型式を考えますとⅣとⅤの土器の型式は区分することが出来ないのではないかどうかと考えています。ですから南都土器編年ではこれは同じ段階のものであるということで認識しています。それから平城Ⅵは長岡京期のものということで想定されていますが、時間枠で捉えた場合に長岡京期だけの時間枠の中だけではこの土器群は収まらないだろうと、おそらく平安京初頭、9世紀初頭ぐらいまで同じ型式群が続くだろうということが考えられますので、平城宮土器編年案との年代幅とはちょっとずれが生じてくるのではないかと考えています。

えらそうなことを言っても私は奈良時代の前半から後半、たった70年の土器の型式編年もいまだなしていないので、えらそうなことを言えないのですけれども、ただ型式的に捉えた土器編年の再編が必要ではないかと考えて、少しずつ作業を進めているところです。レジュメに方向性を書いておきましたが、再編の方向といたしまして、今平城編年では、奈良時代は5段階に分かれているんですけども、おそらく5つには分かれないのでないか、先ほど岡本さんとも話をしていたんですけども、奈良時代の土器はせいぜい3つ、3段階にしか分かれないとじゃないか、というふうに考えています。

玉田さんが示された平城宮土器Ⅲは古相・中相・新相の3段階がありますよ、細分が出来ますよというお話なんですけれども、確かに長屋王邸跡の宅地の中で考えた場合3つの変遷が辿れると思います。今日、長屋王の土器資料のレジュメを持ってきませんでしたので、みなさんお帰りになりました長屋王の本をみていただいたらわかると思うんですけども、確かに土器群の中には時間的な動きがあるのではないかなと思われます。ただそれを平城京全体にあてはめて考えると混乱してしまいます。古相・中相・新相というのは長屋王邸跡内だけの中でのみ通用するものと考えられます。ですから平城宮土器

Ⅲの実年代が与えられていますが、平城京の中全体で考えますと必ずしもこのような年代や土器群の動きが与えられるとは限らないので、古相・中相・新相というのは長屋王だけの話だけで止めて置くレベルの問題じゃないかなという感じがいたします。

平城の編年につきましては、一刻も早く型式編年による型式的特徴を捉えた編年によるものを構築していくかないと今回の北辺坊の様相とか、他の遺跡を考えるときに詳細な検討ができないと思います。最後のところで問題点をお話させていただきますが、実年代が伴う土器群があるというのは都城遺跡だなと、素晴らしいことだなと思いますが、木簡だけに左右されるやり方というのはそろそろ限界かなと思います。編年の話はこのぐらいにしておきます。

次に土器様相についてですが、土器様相の研究というのは飛躍的に進んでいると思います。平城京が本格的に発掘調査されだしてから21年と書きましたけれども、実際は25・6年になると思います。土器様相の研究が進んだ源になりましたのは、諸先輩方の研究、国・県・市それから最近は元興寺さんも調査していただいておりますけれども、発掘調査の公表、なによりもやはり大きかったのは藤原京、平城京、長岡京、平安京初め各都城遺跡をフィールドとする土器研究者によって構成された「古代の土器研究会」という活動が（もう12・3年前にできた研究会ですけれども）この研究会による活動が非常に大きいと思います。先ほども武田さんのほうから発表があったと思いますけれども、各フィールドの枠を越えて共同研究するということが非常に大きなことだったと思います。

私たち平城にいると、平安京のことはよくわからない、藤原京のこともよくわからない、まして長岡京のこともよくわからないといった状況がよくありました。ところがフィールドの枠を越えて皆と土器を見て、いろんな議論を交わすことによって、共同研究する場をもつことによって今までわからなかつた不透明であった部分の土器様相がだんだんわかってきた。わかっててきたということが研究の突破口となってきたというように考えています。これまでの成果を大きくまとめてみると、まず一つは西先生が律令的土器様式ということを提示されたことに端を発しています。結局のところ、律令的土器様式というのは一体何だろうというのが各都城研究者、土器の研究者は実はわからなかつたんです。古代の土器研究会が立ち上がった時、西さんはまだご健在でして、二回目ぐらいまで西先生とご一緒に研究させていただいていたんですけども、その後残念な結果になりますて、基本的に律令的土器様式とは一体なんなのかということを西先生から聞くことができずじまいで終わっています。

その後、私たちはフィールドの枠を越えて、西さんの律令的土器様式というのは一体何かということを基にして活動を始めていった訳です。その結果いくつかのことが徐々にわかってきました。簡単に説明させていただきますと、まず各都城遺跡で大量に出土するのはやっぱり土師器の食器類ですね。その土師器の食器類は各都城域を越えてみんな同じような形をしているということに気付き始めたのです。それが一体どうして似ているのであろうかとか、調整手法も同じであろうかという細かい研究も皆で進めてきました。その結果藤原京から平安京という地域を異にしながらも型式的に連続して発展してきたものであるとか、それが都城で主流となっている土師器であるということに気付きました。それをずっと追いかけて結局のところと都城形土師器の概念を提示することができました⁽⁶⁾。これは各都城のフィールドを越えないと絶対わからなかつた、非常に画期的な研究の一つだったのだろうと思います。

それから都城形土師器という概念ですけれども、これを説明いたしますと残り時間では全部説明できないので今回は割愛いたしますが、要するに都で主流となった形の土器があるのだということになります。その中でも誰が作っていたのだろうかということになってくるんですけども、おそらく平城京

に関していえば、大和の工人集団に加えて河内の工人集団がかなり関わっていた可能性も見出すことが出来ました。延喜式にも大和、河内が土師器の貢納国であったことが記されています。文献からうかがうことは出来るのですけれども、考古学的にはこれが大和の土器でこれが河内の土器であるという指摘はできていませんでした。ところが研究会を通じまして、これが、この土器が河内の土器である、この土器が大和の土器であるといった見通しがつくことができたということで、大和産土師器、河内産土師器と摂津産土師器、初めて聞く名称の方もいらっしゃるかと思いますが、このような概念及び名称も提示できるようになりました⁽⁷⁾。

最近は南山城の南辺部、木津あたりですか。このあたりも土師器の生産地があったのではないかというようなことも考えています。南山城産の土師器がかなり平城京に入ってきたということが最近ようやく人の前で言えるようになってきたかなというような状況であります。私も時間さえあれば平城の土器を見ているのですが、やっぱり河内の土器とか摂津の土器とかとは大きく違う特徴を持っている土器群が、ある一定量入っているというのに気付いておりました。それが南山城でよくみられるような形ですとか技法を持ったものがかなり平城に入ってきてるので、もうこれもそろそろ南山城産土師器と提示できるのではないかというところまでできています。

それから土師器の食器類だけでなくて煮沸形態にも都城形というものがあるということがわかりました。それは都城形甕ということで概念の提示、名称の提示をしています。それにつきましては、土師器の甕のシンポジウムで（井上さんは来ていただきましたけれども）、数年前に奈文研でやったシンポジウムの中で都城形甕という概念を掲示させていただきました⁽⁸⁾。やっぱり都城の形をした、都城の形をしたというのは非常に曖昧ですけれども（都城で主流となる甕はですね、端形で丸型の小型の甕ですけれども）そういうった甕が各都城遺跡から出ておりまして、それが都城が動くたびに甕も同じようなかたちをして動いているところまでわかっています。

もうひとつ、この研究会を通して得た成果の大きな一つですけれども地域が移動して都城が造営されますよね。藤原、平城、長岡、平安京といった地域に移動して都城が造営される。都城が造営されることによって都城の周辺地域もおおきな影響を受けたということが最近またわかつてきています。どういったことかといいますと、要するに在地の工人が作っていた土器がありますね。都城が来る前は在地の色をしていたけれども、それが都城が例えば平城京に来る、そうすると今まで在地で作っていた甕や食器類が都城の色に変わってしまうわけですね。だからそれまでの在地の色がなくなってしまう。それは長岡京においてもそうだし、平安京においてもそうです。そのことについて、考古学的に実証できる可能性がもてるようになってきています⁽⁹⁾。これもやはり都城のフィールドの枠を越えた研究者が集まって研究した成果の大きな一つだと思って話をさせていただいております。

研究はもちろん年代観を提示する、要するに編年するということですけれども、編年を提示するだけではなくて出土遺物から当時のそういう歴史像を語れる手がかりになるような研究が出来るということ、土器は年代だけを引き出すのではなく歴史像にも迫れるような研究の一つであるということをみなさんにお伝えしておきたいと思います。

時間も無くなってしましましたが、次に土器研究の問題点ということで（どうしても説教めしたことになってしまって申し訳ないんですが、都城遺跡のように大量に土器が出てくるところの研究をしている人間の誰もが思っていることですけれども）現在の都城の土器研究にとって最大の問題というのは、土器の全体像を把握することができない、認識する方法を確立できないというのがかなり問題として残されていると思います。土器の量が少なければ全体に目を通して全部チェックできるというよう

なことが出来ると思うのですけれども、平城だけに限らず都城遺跡、都市遺跡の場合、 $100m^2$ 掘っただけでも2~30箱、 $1000m^2$ まで掘らなくても、ものすごく遺物が出土する所では1000箱、2000箱ぐらい出てしまうわけですね。そういうた大量な土器を目の前にしたときに整理する方法が確立できていないため、全体に目を通すことができないわけです。方法論を持たないとどうなるかというと、少し書いて置きましたけれども、たとえば報告書に掲載するときに形が悪い、体裁が悪いというだけで公表されない、要するにレイアウト上の問題でこれはちょっと格好悪いからやめようということで公表されなかった土器があったり、また口縁部片が全体の1/8以下であることを理由に報告されなかったりします。それから破片だけでは情報が引き出せないということを前提条件にしてしまって、最初からその土器を見ない。それから先学が示された土器型式と年代観が合致しないものが出てきてしまった場合、例えば平城Ⅱにはこんな土器があってはいけないので出土した場合、これは「混入だよ」ということで何の検討もなしに「混入」の二文字で外され続けてきた土器もある。これは实际上あってはいけないことだと思いますが、こういった状況をみかけることもあります。要するに、大量の土器群の全体像を把握しないまま体裁だけが良い図版が組まれてしまって報告書に掲載されるということが、全部とはいわないでけなりあると思います。そうなると、せっかく1で挙げたような研究成果を育んできたにもかかわらず、結局のところ土器の研究というのは進むどころか、そのようなやり方を進める限り退化してしまって、意図的な操作が原因で、意図的な操作で自分たちを自分たちで辱めるようなことをしてしまっているので研究の進展なんてないんですね。研究は遅れるばかりなのです。だから基礎的な整理方法の欠落ということによる弊害というのは研究の進展を遅らす、全体の歴史像をみることを拒否するような形をとってしまっている。こういったところに端的にあらわれてきまして、基礎的な整理方法がないと実年代の検討ですとか土器群の実態云々といって口先だけで検討した議論というのは何の役にも立ってこないだろうというふうに考えてあります。これはもちろん平城京だけの問題だけではないのですけれども、要するに土器の全体像を把握する、認識するという方法をまず土器の研究者が認識をもって、それに取り組むということが今の土器研究において一番の必要なことである。それをしないということが一番の問題点であると思うのです。

ですから平城の土器編年や南都土器編年のここの部分がおかしいということを議論するよりもまず基礎的な資料の整理の方法の確立が先決であろうと考えています。

奈良市も平城京から出土した大量の遺物を抱えております。なかなか遺物整理ができなくて人の前でこんな説教めいたことを私が話すのも心苦しいのですが、奈良市のセンターの目標といたしましては、遺物の全体を通して、それを的確に記録するといった作業をやろうということで進めています。一見遠回りでめんどうくさいような研究作業ですけれども、正確な型式とか土器群の実態とか、遺跡・遺物の年代を確立していくためには非常に大切であるということで進めているわけでありますけれども、非常に時間がかかります。だから途中で嫌になって挫折してしまいがちになることも多々あるのですけれども、でもこれが無い限り今回の研究テーマになっているような遺跡の解明は難しい。今回元興寺文化財研究所が北辺坊の発掘調査を大規模におこなっており、かなり成果を挙げられています。その遺跡を解釈するための土器研究が、このような状態であっては、せっかくの調査も無駄になってしまうということになりますので、土器群の実態を追求する視点をもう一度確得しようということを土器研究の問題点として私は考えております。

私が日頃考えていることをみなさん聞いていただくという形になって申し訳ないですが、私が与えられた課題というのは以上のようなことで終わらせていただきます。

- (1) 西 弘海 1976 「平城宮出土土器の編年とその性格」『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所
- (2) 三好美穂 1995 「南都における平安時代前半期の土器様相」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』1995 奈良市埋蔵文化財センター
- (3) 玉田芳英 1995 「第V章考察 3 土器」『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告 - 長屋王邸・藤原麻呂邸の調査 - 本文編』奈良県教育委員会
- (4) 巽淳一郎 1982 「第V章考察 5 土器」『平城宮発掘調査報告XI』奈良国立文化財研究所
巽淳一郎 1985 「3土器 - 旧平城京域における平安時代の土器とその変容 - 」『平城宮発掘調査報告XII』奈良国立文化財研究所
巽淳一郎 1991 「第VI章考察 2 土器」『平城宮発掘調査報告 XIII』奈良国立文化財研究所
- (5) 註2文献
- (6) 小森俊寛 1992 「概説」『古代の土器 1 都城の土器集成』古代の土器研究会編
小森俊寛 1993 「概要」『古代の土器 2 都城の土器集成 II』古代の土器研究会編
- (7) 三好美穂 1999 「土師器食器類の形態」『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
小森俊寛 1996 「都城出土の河内産の可能性がある土器について」第67回古代の土器研究会報告
細川富貴子 1997 「第VI章考察 第5節周濠内遺物堆積層出土土器の様相」『史跡大安寺旧境内 I - 杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告 - 』
奈良市教育委員会
- (9) 小森俊寛 1996 「総説」『古代の土器 4 煮炊具(近畿編)』古代の土器研究会編
三好美穂 1996 「大和」『古代の土器 4 煮炊具(近畿編)』古代の土器研究会編
三好美穂 2003 「都城形甕」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会三好美穂

【みよしみほ = 奈良市教育委員会】